



## ベルリン森鷗外記念館と鹿児島日独協会

鹿児島日独協会顧問 松下敏夫  
(鹿児島大学名誉教授)

ご承知のように、昨年（2018）11月、北九州日独協会主催でベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館の Beate Wonde (ベアーテ・ウォンデ) 副館長・キュレーターの「ドイツ文化講演会」が西日本工業俱楽部で開催されました。岡らざもこの会に出席させて頂いたご縁で、この度、本誌への寄稿の機会を与えて頂きました。

そこで、私とベルリン森鷗外記念館、特にベアーテ・ウォンデさん（以後、平素お呼びしている「ベアーテさん」と記す）との関わりや、鹿児島日独協会の活動などについてご紹介したいと思います。

さて、日独の交流は、長崎出島のオランダ商館で勤務したエンゲルベルト・ケンペルなどの来日以来、三百数十年の歴史があります。この間、明治政府がドイツ医学（ドイツ人による医学教育）を採用したため、わが国の近代西洋医学の基礎はドイツ医学に依拠しました。そのため、私は、医学生の頃からドイツに関して格別な関心と親近感を抱いてきました。

### ベアーテさんとの思い掛けない出会い

「人生は出会いである」と申しますが、ベアーテさんとの出会いは、全く不思議な思い掛けないものでした。1998年、ヘルシンキでの国際会議出席後の帰国の途で、1989年にベルリンの壁が崩壊して東西ドイツの統一を成し遂げた後のベルリンを是非見たいと思い、極めて窮屈な日程でしたが、ベルリンを訪れました。折から、2000年の首都機能の

ベルリン移転を目指し、旧東ベルリンのアレキサンダー広場、ポツダム広場などの主要な場所や建造物は、壮大なスケールで工事中でした。

ブランデンブルク門を貫くウンター・デン・リンドン通りに面したフンボルト大学ベルリン（旧東ベルリン）では、ロベルト・コッホの下で学んだ北里柴三郎や森鷗外のほか、近代日本の礎を築いた多くの日本人留学生が学んでいました。本館



ノーベル賞学者のパネル展

2階の廊下壁面には、アルベルト・AINSHTEIN、マックス・プランク、ロベルト・コッホなど20余名のノーベル賞受賞者のパネルが掲示され、ここでの見学は、まさに興奮の連続でした。

ここで見学を終え、「明日帰国だが、ここまで来たら、やはり森鷗外記念館へ行ってみよう」と地図を頼りに辿り着いた時には、閉館時刻の14時を既に過ぎてドアに鍵が掛けっていました。

入館できないものの去りがたく、入口の辺りをうろうろして写真を撮っていると、「鷗外記念館にいらっしゃいましたか。どうぞお入りください。鍵を開けましょう」と流ちょうな日本語で声をかけてくれた40歳前後の女性がベアーテさんでした。閉館後にフンボルト大学日本学科へ帰って仕事をしていたが、急用を思い出して記念館へ戻られ、私たちと偶然会わることになったとのことでした。

「私は少し仕事をしますから、どうぞご自由に参観ください」との言葉に促され、記念撮影後、鷗外「記念室」など館内をくまなく見学しました。

見学を終え、日独文化交流の懸け橋になりたいと熱っぽく語られたさまざまなベアーテさんの話の中で、北里大学とフンボルト大学との交流が、東西両ドイツの分断や、両大学の世代交代などがあつて途切れているので是非復活させたいとの話が出ました。そこで、北里大学には友人がいるので、帰国後ご意向を彼に伝えましょうと約束しました。

帰国後北里大学の友人に連絡をとり、幸い、その後両大学の交流は再開されたようで、思わず出会いから国際交流の一助に繋がった縁を実感し、大変嬉しいことでした。

この偶然が重なった不思議な出会いについて、同行した妻は、青年医師として海外での勉強を夢見ながら8年前に事故で逝った長男の思いが、このような出会いをさせてくれたのではと呟いていました。

### 独の鷗外記念館改修費用ピンチ、日本からの支援に期待

見出しへは、2016年12月26日付の朝日新聞掲載のベルリン森鷗外記念館のベアーテさんの訴えの見出しだした。

周知のように、この記念館は、1965年、当時日本ペンクラブ会長であった川端康成らが、ドイツ文学を日本に紹介して日独文化交流に尽力した鷗外の功績を称える記念銘板を彼がベルリンで最初に下宿した建物に取り付けてくれるように当時の東ベルリン市長へ要請したのを契機に、これが取り付けられました。そして鷗外のドイツ留学から100年となる



ベアーテ・ウォンデさんとの  
初めての出会い



鹿児島日独協会主催「文化講演会」

も、ロンドンの夏目漱石記念館が資金不足のため閉館するとのニュースが伝えられていました。

ペアーテさんと私の交流は1998年以後も続けられ、ドイツを訪れる機会には時々お邪魔し、鹿児島日独協会のメンバーとも訪問したことがありました。

2009年11月のペアーテさんの訪日の機会には、鹿児島日独協会が主催して「文化講演会」を開催して講師を務めて頂き、終了後、パーティーで大いに懇親を深めました。

こうしたご縁もあって、鹿児島日独協会の役員らで「鹿児島『ベルリン森鷗外記念館』協力募金会」(佐藤榮一会長・鹿児島大学名誉教授)を結成し、私が事務局を担当して活動を行うことになりました。

その結果は、まさに「人生意気に感ず」の様相で、鹿児島県外を含めて130人を上回る方々から募金への大きな賛同が得られ、その芳志6,000ユーロ余りを先方へ送金することができました。

ペアーテさんからは、リニューアルした常設展の写真に添えて、「このような多大なご援助を頂けるとは思ってもみませんでした。天にも昇る気持ちです。皆様の寛大なご支援に大変感激しております。このご恩にどう感謝していいか分かりません。どうか皆さまに宜しくお伝えください。リニューアルした弊館への皆さまのお越しを心からお待ち申し上げます」というメッセージが寄せられました。

### リニューアル・オープンの記念館を訪問

老朽化していた記念館の常設展示室は、ベルリン大学の創設者ヴィルヘルム・フォン・ファンボルトの生誕250年に当る2017年3月20日にめでたく新装開館しました。

そこで、ペアーテさんからの勧誘もあり、是非見学したいと思い、妻と9月に訪問の計画を立てました。高齢で抗がん剤治療を続けている私と妻だけの旅行を心配して、友人の内科医の高岡茂氏と息子が同行してくれて、心強い限りでした。

訪れた新装の記念館は、ペアーテさんの並々ならぬ情熱と博識を反映して、誠に素晴らしい出来映えでした。

る1984年には「森鷗外記念室」が創設され、1989年には「森鷗外記念館」となり、その後、フンボルト大学ベルリンの日本学科の付属施設として、ドイツ人に日本文化を紹介する「センター」と位置付けられることとなりました。

この記念館の常設展示室を、老朽化に伴い30年ぶりに改修工事を行うことにしたが、資金不足で困っているとのことでした。折し

従来のドイツ語中心だったパネルの説明に日本語が加えられ、白木や和紙が使用されている展示物は、岩倉使節団やフンボルト大学の教育理念「自国や外国で学んだことは、全世界に還元すべきである」の紹介に始まり、入口付近の廊下には、1870年から1914年にかけてベルリン大学で学んだ747人の日本人留学生の名前がリストアップされていました。次いで、文学者、翻訳家、軍医、衛生学者、ジャーナリストなど多面的に活躍した鷗外の足跡と「舞姫」などの作品、日独二国間の交流とその影響など時代背景も加えて詳細に解説しており、別室の「記念室」には、以前と同様に、懐かしい鷗外のデスマスク、ベッド、机、洗面道具、タンスなどの調度品が置かれ、留学当時の下宿を再現しており、彼の生活ぶりを窺うことができました。



リニューアル・オープンの  
ベルリン森鷗外記念館

新装開館以来、来館者からは、明るくなった、非常に見やすくなった、こんなに多くの資料があるのには驚いたなどの声が寄せられ、大変好評で、来館者数や滞在時間は大幅に増加したとのベアーテさんの話は、もっともだと合点したことでした。

今回のリニューアル・オープンを契機に、この記念館が日独文化交流の拠点として益々発展することを期待しています。



ロベルト・コッホ広場にて

なお、今回の訪問でも、ベアーテさんには、シャリテ内のロベルト・コッホ広場や隠れたご当地自慢のレストランの紹介を始め、大変お世話になりました。ベアーテさんに初対面だった同行の友人や息子は、ベアーテさんの日独文化交流に懸ける熱い情熱と博識ぶりや細やかな心配りに大感激でした。

### 鹿児島日独協会の設立とその後の活動

さて、鹿児島日独協会は、1971年5月、当時鹿児島大学医学部教授であった久保隆一・城哲男・私の研究室の前任者の北原経太先生らによる南九州日独医学協会を母体にして設立されました。初代会長は上村行徳鹿大名誉教授、初代事務局長は城哲男教授でした。



鹿児島日独協会30周年記念祝賀会

設立後、駐日ドイツ連邦共和国大使やオーストリア大使、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事、ドイツ語圏からの文化人・研究者、在鹿の留学生などを含むドイツ所縁の方々などによる多彩な人々との交流、講演会等の例会を年に数回程度開催し、その他、ドイツ映画祭、「夏期ドイツ語講座」なども行っていました。

また、会の創立10、20、30、40周年の節目の年には、工夫を凝らした記念講演会、コンサート、祝賀会などが開催されていました。この頃の会員数は、50名程度でした。

### 最近の鹿児島日独協会の活動

鹿児島日独協会は、2014年の総会で会則の大幅改定を行い、役員の職務分担による新体制へ移行しました。会則では、「世界の平和を希求し、学術・経済および諸文化面における日独両国およびドイツ語圏の国々との友好関係を助長し、併せて国民の相互理解の促進と親善に寄与すること」を目的にしています。

因みに、ドイツ語を公用語としている国は、ドイツ、オーストリア、スイス（ドイツ語圏）、リヒテンシュタイン、ルクセンブルグなどで、世界の母語人口では、ドイツ語は日本語に次いで第10位だそうです。

会は、現在、会長は山原芳樹鹿大名誉教授、事務局長は中島大輔鹿大法文学部教授を中心、副会長4名、理事9名、監事2名、顧問3名の役員で運営されています。



サロン・コンサート例会

具体的活動内容としては、定期的なものとして、年4回の例会（1月の総会講演会例会、6月のサロン・コンサート例会、秋季講演会例会、12月のクリスマス例会）開催、日独の文化交流等に関する学習会「さつま・ドイツサロン」（原則奇数月の第3土曜日午後）開催。ドイツワインを楽しむ会の開催、外国人留学生の日本語弁論大会、クラシック・コンサート・リサイタルの後援などを行っています。

例会は、2019年3月までに206回を数えますが、2016年から始まった「サロン・コンサート～室内楽の夕べ～」は、新たに鹿児島在住の若手演奏家が会員として参加して開催されることとなり、クリスマス・コンサートを含め参加者を楽しませてくれています。

2014年から始まった「さつま・ドイツサロン」は、これまで25回開催していますが、この内容は極めて多彩で様々な話題提供があり、「日独交流150年の軌跡」（雄松堂）の輪読会や、「ドイツ語圏のニュースを親しむ会」なども行われ、活発な意見交換を行っています。2017年11月開催のさつま・ドイツサロンでは、ペアーテさんに「フンボルト大学森鷗外記念館 新常設展について—異文化との交流—」の講演をして頂き、募金活動協力への謝辞が述べられ、講演終了後、ペアーテさんのお柄に誘われて、活発な意見交換が行

われ、大いに親睦を深めました。

その他、不定期な活動としては、最近は、大阪・神戸ドイツ連邦共和国ケーラー総領事記念講演「2017年連邦議会選挙を終えてー最新のドイツ政治情勢について」、鹿児島大学との共催による写真展「アンネ・フランク『希望の未来』」展やドイツ統一25周年写真パネル展「ドイツ統一への道」、「宗教改革500年」パネル展、「『暗やみに光を灯した人』杉原千畝展」などを開催しています。今年も、「『子供の教育と人権の父』コルチャック展」、「ベルリンの壁崩壊30周年パネル展」などの開催を予定しています。

また、ドイツ語圏との文化・学術等の交流・関連団体等との共催・協力などを主たる活動にしています。

本会は、2021年には創立50周年を迎えるので、実行委員会を発足させ、記念講演会等の開催、記念誌発行などの記念事業を成功裏に行うこととしています。

なお、本会の会員は会員の紹介により入会でき、年会費は、一般会員3,000円（但し、同一世帯の2人目は1,000円、3人目からは無料）、学生会員1,000円、外国人留学生無料、維持会員は一口1万円以上としています（現在の一般会員数は、80名程度）。

本会では、FaceBookを開設していますので、関心のある方は、ご参照下さい。

### 終わりに

この度、ベアーテさんとのご縁で、貴日独協会の皆さまと親しくさせて頂く機会を作つて頂き、誠に有り難うございました。私どもの日独協会は、これまで、大分日独協会との交流が少しあった程度でした。

全国日独協会連合会総会やドイツ大使公邸夏祭りなどの全国の会に出席した私どもの若手会員からは、インターネットなども活用して、せめて九州管内だけでも日独協会の会員間で、日独文化交流・協力の輪を作れないかとの意見が出ています。

こうした若手会員の希望にも応えるべく、出来れば九州管内の日独協会で『九州管内日独協会連絡会（仮称）』を設立し、相互の情報交換・協力を図るようにしては如何かと思います。例えば、何処かの日独協会で、ドイツ語圏の大使・総領事や著名人などを招いて講演会等を企画する場合や、ドイツ語圏に訪問・滞在した人などで興味ある講演会等を開催する場合、お互いに情報交換して、可能であれば他の日独協会でもその講師で講演会等を行う様にしては如何でしょうか？ 旅費・宿泊費等経費の節約にもなるでしょうからー。

長時間、拙文にお目通しを頂き、誠に有り難うございました。

貴日独協会の益々のご発展を祈念して、稿を閉じさせて頂きます。



さつま・ドイツサロン「ベアーテさんを囲む会」